

## 南奥駆3名山縦走

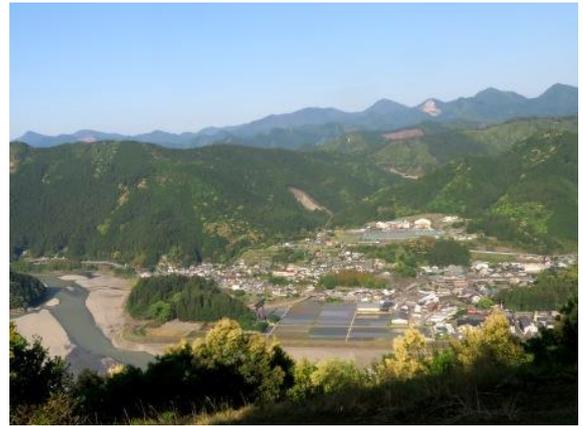
2018年4月27日～30日 旗振支部 瀬川 滋

大峰奥駆道は桜で有名な奈良吉野山と熊野三山を結ぶ修験道の修行場として大峰山脈の主稜沿いに開かれた約90kmの国内最古の縦走路である。この道には熊野本宮大社の本宮証誠殿(第1廡)に始まり、吉野川河岸の柳の宿(第75廡)に終わる75の廡(たゞき)と呼ばれる行場がある。熊野本宮から吉野に向かうのを順峯、吉野から本宮に向かうのを逆峯と言い、1300年前に役行者が開祖したという。明治の修験道禁止令以降、水場に乏しい南部は荒廃していた。関西に住む私も吉野から釈迦ヶ岳・太古ノ辻・前鬼までの北奥駆には過去断片的に何回も登っていたが、藪漕ぎとビバークが必須の南部は足を踏み入れたことは無かった。しかし「山溪」に地元の新宮山彦Gが登山道整備や山小屋建設までを行って再興を果たし、奥駆道が熊野古道の最も険しい道として世界遺産に登録されて以降、登山者が増えているという記事が載っていたのでかねがね是非挑戦したいものだと思っていた。

GWには東北大地震以降毎年ボランティアを兼ねて東北の山に行っていたが、一昨年からは趣向を変えて、八丈島、隠岐島と離島の山に登ってきた。今年もどこか離島にと考えていたが、山仲間本人や家族の健康上の理由から中止になってしまった。ならば懸案の南奥駆に単独挑戦しようと考えた。南奥駆は前鬼から入って本宮に抜ける逆峯が一般的だが、バスの便が悪いので車で出かけるすると、本宮-前鬼口間にバスの便が無くタクシー利用しかない。そこで本宮から順峯し、山での1日目(9時間歩行)玉置神社泊、2日目(11時間歩行)行仙宿泊、3日目(12時間歩行)釈迦ヶ岳麓・深仙宿泊、4日目は8時間の林道下り後バスで本宮に戻るという計画を立てた。本宮の標高が約60mで、釈迦ヶ岳が1799mとアップダウンを繰り返しながらずっと登っていくというハードなコース。29日出発して3日に帰る予定だったが、2日が雨との天気予報が出たので、慌てて27日に出発。日本一長い路線バス五新線が走る国道168号線を一路南下して熊野本宮泊。

### 4月28日 本宮—五大尊岳—玉置神社

熊野川に架かる備崎橋を6:00スタート。杉木立の中の山道を登っていくと1時間でシャクナゲの美しい吹越峰262m。更に少し登ると熊野川を挟んで、熊野本宮の町が望める。アップダウンしながら少しずつ



見下ろせる熊野本宮の町並

高度を上げていき第4廡吹越山を過ぎると「宝篋院塔」という仏塔へ。再び大きく蛇行した熊野川の景観が見え、更に登っていくと大黒天神岳573mへ到着。第5廡とあるが展望は全く無い。山を下った所が六道の辻(第6廡の金剛多和の宿跡)。そこから標高差400mの岩場混じりの急登が続く。シャクナゲの大群が美しい。1時間半程で関西百名山の五大尊岳825m(第7廡)に到着。更に2時間程で



五大尊岳の廡

初めて1000mを超える大水の森を通過し、この日の最高点の大森山(1078m)に到着。ウェルト・シュワフ・ストーブ・水・4日分の食糧等の入ったリュックの重さがじんわりきいてきてペースは鈍い。ここから少しずつ下っていき林道とクロスすると玉置の辻。鳥居を潜っ

て杉の大木の中を少し登っていくと熊野三山の奥の宮で、紀元前 37 年崇神天皇創建と伝えられる玉置神社に 16 時過ぎ到着。杉の大木に囲まれた社殿も荘厳だが、本殿奥の夫婦杉、樹齢三千年の神



玉置神社社殿

代杉の奥に沈む夕陽が神々しい。神社は自炊だが掛け湯で汗を流せるのが有難い。同宿者は広島と宮城から来たという修験者。白い鈴懸衣、鹿皮の引敷に錫杖という見慣れた姿だが、足許が今でも登山靴ならぬ地下足袋というのには驚いた。

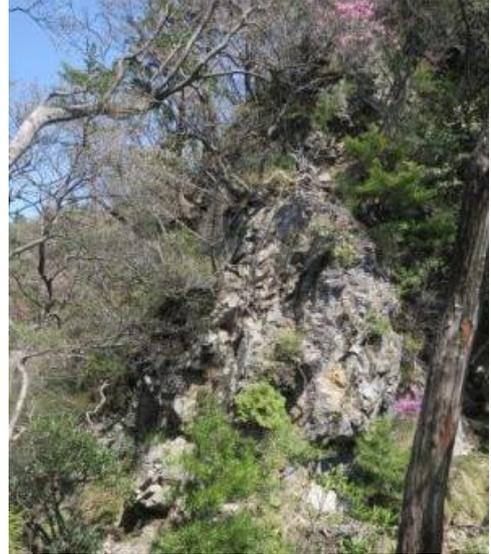
**4月29日 玉置神社—玉置山、笠捨山—行仙宿**  
修験者は朝 3 時頃出発。それから一眠りして朝食後 5 時にスタート。ツツギが満開の神社の周りをうろ



玉置神社のツツギ

うろしてから杉木立の中をここも関西百名山である玉置山(1076m)に登る。パラソラアンテナがあっげんなり。頂上から少し下ると玉置展望台。これから辿る香精山・地藏岳・槍ヶ岳・笠捨山の連峰が望める。更に下っていくと花折塚。大塔宮護良親王の忠臣片岡八郎の墓所で、後年道行く人が花を折って供えたことから命名されたという。玉置山からの最低コル迄下り、ここから一気に香精山への標高差 450m の急な登りが続く。途中稚児の森、

蜘蛛ノ口、古屋の辻、塔の谷峠をアップダウンする。新緑の中に一際目立つ紅の山ツツギが美しい。やがて岩混じりの道となって、第 13 靡の香精山 1121m に到着。第 14 靡の拝返し、第 16 靡の四阿宿跡と修行所が続き、そこから厳しい上りの断崖。その



地藏岳への上りの絶壁

垂直に近い 10m ほどの岩壁にぶら下がっている鎖は使わないで、三点確保で登り切ると狭い地藏岳頂上。ここが今回一番の核心部という。そこからその名の通り形のいい槍ヶ岳を越えると穏やかな杉林の道となる。葛川の辻からの厳しい登りの後、関西百名山今回 3 山目、今日の最高峰・第 18 靡の笠捨山 1353m に到着。役行者もその苦しさに笠を捨てたと言われている。頂上からは北に明日以降辿る行仙岳の奥に目的の釈迦ヶ岳始め奥駆の峰々が見え、改めて奥駆の雄大さを実感。笠捨山から下って 2 つのピークを越えて更に登り返すと旗が見えてきて、17:20 やつと行仙宿山小屋



笠捨山頂上からの奥駆北部の山々

着。リュックの重さからか、左膝を痛めて着いてもぐったり。小屋ではビールが売られている。そのビールを口にしてると山菜の天ぷら、鮪の刺身、鮪のかが出て来て、さあ食べよと勧められる。夕飯を炊くだけの気力も無かったのでご相伴に預かる。聞けば今回は88歳と84歳の2人、70歳代2人始め新宮山彦Gの重鎮が小屋番と道路整備を兼ねて登っておられて宴会中。途中沈む夕陽鑑賞の中断を挟んで、小屋開設や、こことこの先の平治ノ



行仙宿から見た夕陽

宿、持経ノ宿の山小屋3宿の管理そして登山道の巡回・補修等々の苦労話や、あの「塩爺」も82歳でこの小屋まで激励に来たという話等山談義に花が咲いた。それにしても南奥駆を歩いている人は最近の熟年ゲームに反して皆若い、今年74歳の私もここでは鼻垂れ小僧。山彦Gの皆さんの若さ溢れる気概に只々頭が下がった。



新宮山彦グループの皆さんとの宴

#### 4月30日 行仙宿—転法輪岳

早朝に起き出し、ご来光鑑賞に挑戦するが太陽は若干山に隠れて虹彩のみ。膝の調子が思わしく

無く、今日の最も長い行程に耐えられそうもない。もし強行して深仙宿に遅く着いたとしても宿が狭くてツル泊となりそうだが、その設営・食事作りは無理と判断。小屋から30km以上の林道歩きでの下山を決断。するとGの1人の方から「今日作業後下山するので乗っていけば」との有難〜いお誘い。救いの神に乗ることとした。ならば午前中空身で行ける所まで行ってみようと小屋を7:30出発。すぐの上りを登り切ると第19靡の行仙岳山頂。巨木が生えているが、ハラホラの鉄塔が立っていてがっかり。下って第20靡の怒田の宿跡。その後標高差100m前後のアップダウンのピークを越えて俱利伽羅岳着。ブナが多い。時間があるのでもう少しとヒメヤブの木が多くなる道を更にアップダウンして10:20転法輪岳(1281m)に到着。今回の山行はここまで。



今回の最終ポイントとなった転法輪岳

奥駆道を約10km強残すこととなる。何とも中途半端な結末。歳には勝てないということか。残念。行仙宿まで引き返し、不要になった食料等を小屋に残して登山口まで下山。登山口から車で本宮迄送って頂く。車中で南紀の無名の山に登る魅力の伝授を受ける。本宮からは自車で川湯温泉に立ち寄って川原の湯で汗を流した後、深夜帰神した。

今回の山行、低山のため殆どで樹林が道を覆い、山々の展望はあまりきかなかつた。しかし木々の新緑や満開のシャクナゲ・ツツジが目を楽しませてくれた上に、所々にある靡が8世紀から続く人の営みを髣髴させてくれた。また奥駆の全踏破は適わなかつたが、関西百名山の最深部の**五大尊岳**、**玉置山**、**笠捨山**の3山に登れたのも大きな成果だった。